昭和の五十景 ②

スクリーンとまぼろし

手づくりの味

16-3/2

フィルムが回り始め、筐（しょう）ひちりきの音が試写室に流れた。低く、鋭く、調曲を取り入れた悲しげなリズムが、幽玄の世界を呼びさます。森雅之、田中絹代、京マチ子、水戸光子、小沢栄、上田吉二郎……懐かしい顔が画面にあらわれては消えてゆく。琵琶湖上、朽木（くちき）屋敷の暗かり、薮（やぶ）の中の温泉に身をひたす源十郎と若狭。宮川一夫のカメラは、白黒を、まるでカラーのような迫真力で見せてくれる。一時間三十七分は、あっという間に終わった。

初めて見たベニス映画祭（一九五三）銀獅子賞受賞作品の「雨月物語」（監督・溝口健二）。雑然とした映像になれている目には、驚くほど新鮮であった。京都・太秦（うずまさ）の大映映画京都撮影所。外へ出ると氷雨だった。

プロデューサーの市川弘さん（四四）が雨に打たれながら「録音助手としてこの作品にタッチしました。きょうで五度目になりますが、いつ見てもいい写真です」と言った。

事務所へ行くと、ストーブを囲んでいた革ジャンパーやサングラス、ヒゲづらの人たちが「どうでした」と口々に尋ね、尋ねながら満足そうな顔をした。「あの写真には、長い間かかって築き上げた手づくりの味があるもんなあ」。そういうセリフも出た。

手づくりの映画――衣装部屋で働く伊藤なつさんは、四十年間、それに魅せられた人だといっていい。いま、六十二歳。「伊藤さん」とはだれも呼ばない。監督も、長谷川一夫、市川右太衛門、山田五十鈴さんらも、親しみをこめて「おなっちゃん」と呼ぶ。

おなっちゃんがこの世界に入ったのは昭和十一年であった。父は第一映画の事務員、兄は日活の俳優。自宅は太秦に近い車折（くるまさき）神社のあたりにあった。そのころ、映画界は軍国主義のあらしにもまれながら娯楽の旗手として成長。京都でも太秦を中心に、日活、松竹、第一映画、新興キネマ、それに片岡千恵蔵、嵐寛寿郎らのプロダクションが群立していた。「お裁縫が好きで、衣装の仕事がしたかったので」と、二十二歳のとき、第一映画に入社した。最初にかかわりをもった作品は「お嬢さんと新鮮」（四十八人目の同志）。監督は伊藤大輔、主演は坂東好太郎、山田五十鈴。主任に伴われて走り回った。どんな着物をあつかったのかは、もう忘れてしまったという。

昭和十七年、日活、大都、新興キネマが合併してできた「大映」（大日本映画製作株式会社）に移ってからでも、衣装を手がけた映画は二百本を超える。大映・太秦が生んだ名作のほとんどに、おなっちゃんの手がはいっている。「雨月物語」もそのなかの一つだ。魔性の女、若狭を演じる京マチ子のソデのさばきがうまくいかなくれた。「時別功労賞」を宮川一夫さんの手から受け取った。「立いたらあかん」と自分にいい聞かせているのに、胸の奥がだんだん熱くなってきた。そして監督や俳優、スタッフの顔が浮かんだ。

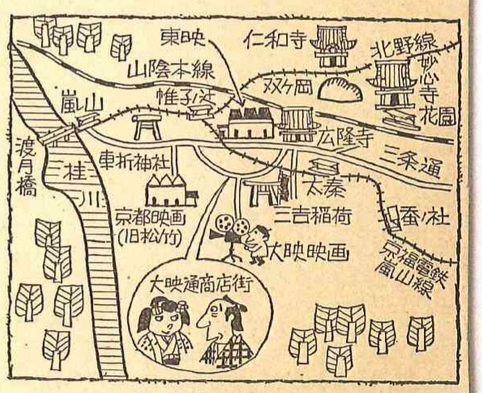
おなっちゃんは去年の九月一日で定年になった。かけがえのない腕の持ち主なので、他の会社からの誘いも多かった。だが「生き返った大映に骨を埋めたい」という気持ちが強く、いまは非常勤の契約者として働いている。仕事は勝プロダクションのテレビ映画「新座頭市物語」だ。「早く前のように私たちの手で映画をつくりたい」――それが、おなっちゃんの昭和五十年の夢である。

撮影所はひっそりと静まっていた。時折「新座頭市」に出演するマゲ姿が目につくくらいだ。昭和二十六年、ベニス映画祭でグランプリに輝き、水冰の古橋広之進さん、ノーベル賞の湯川秀樹さんとともに国民を喜ばせた「羅生門」カンヌ映画祭撮影最高賞の「源氏物語」（昭26）同グランプリの「地獄門」（昭28）ベニス映画祭銀獅子賞の「雨月物語」「山椒大夫」（昭29）……と、ことごとく生まれた名作の数々。壮大なセット

あの街かど、この辻に太秦の古き良き時代が…… アサヒペンタックス6×7 タクマー200ミリ コダックEX ASA64 F5.6 1/25秒

紀行

題字 阿波野 青畝



「羅生門」の栄光 再び

ある昭和史

太秦で初めて映画を撮ったのは阪東妻三郎プロ、大正十四年暮れのことである。続いて昭和三年、日活が太秦撮影所をつくった。その後、片岡千恵蔵、市川右太衛門、嵐寛寿郎、入江たか子らスターによるプロダクションが設立され、解散、合併されたりした。昭和十七年、大映が発足。第一回作品は「維新の曲」だった。主演は阪東妻三郎、片岡千恵蔵、市川右太衛門、嵐寛寿郎の四大スター。昭和二十年九月「映画演劇に関するマッカーサー司令部発表」で剣劇が禁じられたこともあったが、戦後の娯楽の少ない時期に映画はたちまち王座にのしあがった。

二十六年、東映（前身は東横）ができ、前年には松竹が下加茂から本拠を移してきた。大映、松竹、東映が軒を並べ「太秦は日本のハリウッド」といわれた。大映が六割配当で世間を驚かせ、嵐山へ向かう観光客の人間近くが撮影所に立ち寄ったこともある。だが、テレビの普及とともに二十四年をピークになだれ現象。松竹は四十年に閉鎖（現在京都映画）、大映は四十六年末に倒産（四十九年九月新社設立）。東映だけが仁侠（じんきょう）路線で生き残った。

この商店街も、大映が倒産したころには名を残すかどうかですいぶん議論したそうである。結局「子供のころから親しんできたんやないか。つぶれたんならせめて名前だけでも」（上杉敏郎会長）ということになった。町自体が、やはり、映画をもう一方から支えてきたといえるだろう。

「映画の灯を消すな」を合言葉に、二年と九か月、活動屋たちはがんばった。倒産時の長期の闘争にしてはめずらしいほど製作現場の人たちは脱落しなかった。CMの製作、勝プロへのスタッフ貸し出し、他社への出かせぎ……などで生活費をやりくりした。四十九年九月一日、新しい会社ができた。総勢百一人。事務部門がいなくなっていたので、ベテランカメラマンが営業、女優さんが庶務、装飾が経理を担当した。女優の三好文さんのもう一つの肩書は、総務課労政係員。昭和八年、日活太秦製作の「八月十五日」（主演・大河内伝次郎）に子役で出演したベテランだ。「あたま（かつら）をとっておふろで思いきりのびをした時、女優をやっていてよかったとしみじみ思います。うちは太秦に生まれて育って、タイトルに名前がでて……悔いはありしません」

今春までには第一作の撮影が始まる。いま現場を離れている人びとの念願は、もう一度、その戦場に出向くこと。ベテランも、闘争の時代しか知らない若者も、その心は一つである。

事務所のそばにある「羅生門」のグランプリは、冬の日を浴びて光っていた。その輝きを見ていると、もうすぐ「ヨーイ、スタート」の声とともにいきいきと動きまわるに違いないあの人たちの顔が浮かんだ。

町がささえる

16-3/2

吉田さんは、昭和二十四年に、今度は組長として古巣へ戻ってきた。ふん囲気はがらりと変わっていた。「羅生門」がグランプリをとり署員はもちろん、地元も「太秦は世界」や」と鼻高々であった。吉田さんらが出張先の宿帳に「太秦」と書こうものなら、女中さんたちが寄ってきて話をせがまれたものである。あまりにも人の出入りが激しいので、嵐電（京福電鉄嵐山線）の太秦駅と帷子ノ辻駅の間にもう一駅を、という陳情が出たのもこのころだ。

昼下がり。東映京都撮影所からマゲ姿の男たちが食事に出る。大映からも髪を結いあげた女優さんが買い物にくる。観光客はめずらしそうに振り返るが、町の人たちは、とんと気にしない。スターが車で通っても見向きもしない。

このあたり、嵐電の太秦から帷子ノ辻までの約七百尺が「大映通商店街」である。一角に「三吉稲荷」。鳥居の右には「昭和五年吉日」、左には「太秦日活撮影所長、池永浩久」の文字。周囲の石柱には、大河内伝次郎、入江たか子、伴淳三郎といった名が……。近くにいた老人に聞くと、またたく間に往年の大スターの名を十人あげて「あの人はあの家にいましたんや」などと懐かしそうに話してくれる。そして、四十代のひとたちは、学芸会で親ゆずりの名演技を披露した俳優の子供たちのことを思い出すのである。

骨を埋めたい

16-3/2

昭和四十七年十一月十二日、彼女が晴れの舞台に立った。「第十九回京都市民映画祭」。満員の京都会館で拍手を浴びて舞台へ上がった。「大映」は前年の暮れに倒産していたが、駆けつけた仲間が「おなっちゃーん」と声をかけた。

文 河内鶴太郎
写真 田辺 昇

次回は「わが恋人 明石原人」

550
1/14